



# IUFRO-J NEWS

No. 6

## 日本大会 1981年9月開催に決定

既報のように IUFRO 理事会は去る 10 月 7 日～13 日の 6 日間、西独のミュンヘン市、ミュンヘン大学林学部において開催され、わが国からは佐藤副会長、松井オブザーバーが出席した。そこでこの会議において協議された内容を松井オブザーバーの口述から紹介すると次のとおりである。

この理事会にはドイツ、日本、ノルウェー、フィンランド、フランス、イタリア、ユーゴスラビア、オーストリア、アメリカ、イラン、カナダ、オランダの各国からと FAO 林業部代表が出席した。

理事会は年 1 回開催され、IUFRO 全体の運営に関し討議決定する会議であるが、今回の理事会は、第 17 回日本大会が討議決定されるので、わが国にとってはきわめて重要な会議で、次のような事項が協議決定された。

### 1. 日本大会について

#### (1) シンボルテーマ

“Research Today for Tomorrow's Forests”

このテーマは英語で統一することとし、各国語についてはそれぞれの国で本題の主旨を生かして適切な用語に訳してよいことになった。

#### (2) 会期

1981 年 (昭和 56 年) 9 月 6 日 (日) 登録受付

9 月 7 日 (月)～12 日 (土) 大会

9 月 13 日 (日)～18 日 (金) エクスカーション

#### (3) 会場

京都国立国際会館 京都市左京区宝池

### 2. その他議事概要

#### (1) IUFRO の PR 版としてパンフレットを刊行する

こととなりその原案が提出されたが、図案等について意見が出され再検討のうえ発行することとなった。このパンフレットについては装幀は本部どおりとして内容を日本語版に再印刷したものを国内に配布する予定である。

#### (2) 各地域の活動状況報告

各国とも経済状態がきわめてきびしく、林業研究部門にも少なからぬ圧迫を受けている状況であるので、このさい研究の重要性を強調すべきであることが申し合わされた。シンボルテーマの選定についてもここの事情が反映されて決定した。

#### (3) 各国語林業用語集の早期完成

用語に関する研究グループを強化し、この推進をはかって、発足以来懸案の用語統一の問題解決をはかることとなった。これは情報検索のためとくに急がれている。

#### (4) 日本大会について

日本大会運営の細部については、さらに検討を要する問題が多いので明年の理事会において十分討議することとし、日本側としても問題を整理して原案を用意することが要望された。とくに研究グループの数と時間、各部門間にまたがる研究課題の設定と討議方法、ブリーディングの発行方法、総会講演の演題と演者の選定など。

### 3. 明年以降の理事会予定

1984 年 9 月中旬 英国、エジンバラ市

1985 年——— ソ連邦、モスクワ市

その他研究成果の普及方法、FAO との関連等について討議された。

さらにこの会議の終了後 2～3 日の林業地視察旅行があったが、公務の事情で松井オブザーバーは参加せず帰国した。  
(文責 事務局・雨倉)

## IUFRO 大会と世界林業会議の調整問題

— 昨年の IUFRO 理事会で、Alessandro de Philippis 教授の上記論文が提出されたが、IUFRO 大会と世界林業会議の関係を理解するのに役立つ論文であるので、ここに要旨を取りまとめた— (事務局)。

第 1 回国際林業会議 (世界林業会議の前身) は 1926 年に、当時の政府機関であった国際農業協会 (FAO の前身) の招集で、ローマにおいて多くの林業人が出席して開催された。

その席上で、世界の林業問題を研究する中央機関の創設が提案討議され、その機関が林業研究の推進や調整にどう関与すべきかが問題となった。当時すでに、1892～1910 年の間に 6 回の大会を開催した国際林業試験連合 (IUFRO の前身) が存在し、しかもより大規模な組織に再編成しようとしており、これとの関係が討議された。しかし国際農業協会は、従来どおりすべての科学団体の自由を尊重し、団体の大会から学んでいくことを目指すべきだとされた。

第 2 回国際林業会議は 1936 年に開催され、造林に関する国際会議を準備主催するための国際造林常任委員会が中央機関として設置されたが、1929 年の第 7 回ストックホルム大会において、国際林業研究機関連合として再編された IUFRO とは、管轄や権限の点で互いに干渉することなく、IUFRO の代表者も有資格メンバーとして歓迎するとされた。一方、1932 年の第 8 回 IUFRO 大会では、一般林業会議との合同の実現性について討議され、IUFRO の独立性を確認した上で、次回のハンガリー大会 (1936 年) を合同で開催しようという、国際林業会議の提案を試験的に受け入れることになった。

しかし、実際には両大会の日程や場所がずれていて実現しなかった。このことから、両大会を合同で開催する試みは難しいと考えられ、今後このような努力を重ねるべきではないとされた。それにもかかわらず、両会議は互いに招待状を送って、1940 年にヘルシンキで合同大会を開催することを約束しあったが、第 2 次世界大戦のために立ち消えとなった。

この合同問題は 1940 年代の終りに再び生じ、その頃に国際農業協会と国際造林委員会の活動を吸収した FAO が設立され、IUFRO の存続も危機にさらされた。しかしこの危機は、IUFRO と FAO との間の協定の成立によって回避された。この協定は、IUFRO の独立性を確認すると同時に、両機関の緊密な協力の道を開いた。そし

て合同会議の組織についても意見が交換されたが、相変わらず現在まで別個の形で大会を開催してきている。

### IUFRO 大会と世界林業会議の経過

IUFRO 大会の発端は、ドイツの林業試験場が試験方法論の調整、試験結果の総合討論、用語の統一や文献の普及を行う目的で、各国の林業試験場長によって組織された会議であり、1893 年の第 1 回から 1910 年の第 6 回大会までの目的はこの線にそったものであった。

1929 年のストックホルム大会で再編成されて新しく IUFRO なる名称となり、林業試験研究分野の国際協力を促進する新しい仕事加わり、そのために特別問題研究委員会の創設が必要となった。また大会は討論の他に、ニクスカーションと現地討議が重要視されることになった。

戦後の再編大会は 1948 年にチューリッヒで行われ、冒頭に一般的問題を協議し、続いて研究委員会の報告が討議された。そして森林科学の分化を配慮して 11 科学部門に活動分野がわけられ、各部門は一定の研究計画を推進発展させる仕事をもつようになった。続く 3 回の大会 (ローマ、1953 年; オクスフォード、1956 年; ウィーン、1961 年) では 11 科学部門で行われた活動が討論され、一般的に興味のある問題は開会および閉会時に言及されただけである。しかしいくつかの討論課題は、FAO の世界林業大会 (ヘルシンキ、1945 年; デラデン、1954 年; シアトル、1960 年) での動告に基づいていることは強調されるべきことである。

1967 年のミュンヘン大会では、IUFRO が研究単位数を分化増加し、一般的興味のある問題の研究を強化して研究領域を拡大し、これにより FAO の活動に指針を与えることができ、また林業開発の世界的傾向と、それにかかわる人間活動を考究するために研究機関の問題をこえて討論を行う方向を重視し、これらを具体化すべき時期が来たと判断した。

1971 年のゲンスベル大会は、まさに転換の時期と考えられ、新しい規約と組織体系が容認された。大会は「森林の実践活動を強化することでの研究の役割」というテーマをもち、特定の討論に先立って全体会議といくつかの主要論文に基づく本会議が開催された。しかし、より分化した構成をもち、討論範囲を拡大しようという努力は、目まぐるしく変化している世界林業で、研究を必要

とする問題に挑戦するには不十分という意見もある。

1976年のオスロ大会では、そうした企画がさらに堅持され、大会テーマである「限られた資源界における林業」に関連する4会議が開会期に組織された。これらの会議はFAO林業局長を含む世界の傑出した著名人によって行われた。これらの考察は土地利用政策と未来の生活向上を目的とする合理的森林経営の重要性に関する勧告のなかに反映された。

大会は8本会議と11部会が開催され、また206研究単位の会合が37の会議場で行われ、293の招待論文と前回から大会までに組織された100以上の特別会合の結果とが論議された。また2つの特別シンポジウムがあり、そのひとつはIUFROとFAOの共同であった。参加者は同伴者を除いて1,065人で、37の小会議場平均で29人、206の研究グループ単位では平均5人の出席で、これはある会合では出席者が少なくして正規の討論ができなかったり、また興味があっても専門以外のグループ会合に出席できなかったことを意味する。こうした所見は、サムセット会長とノルウェーの同僚たちの賞賛すべき勇氣と配慮で成功したオスロ大会の複雑な組織を批判するのではなく、大会に過度の負担をかけずに、IUFRO内外の協力を促進するのに適した方法を追求している現在の理事会に反映させたいからである。

IUFRO大会の発展と最近の規約からみて、IUFROは単にメンバー機関と研究者間の意見の交換や接触によって国際協力を促進するだけでなく、国内外の科学、技術、文化機関、とくにFAOと密接に共同して研究成果の普及適用を促進することを希望している。このためには目的の明白な研究、専門林業家による研究成果の応用の推進強化、さらに国家行政機関による研究の必要性に対するまじめな理解などを強く求めていく必要がある。この意味で、政府間機関であるFAOが後援し、政府や林業経営者の代表が参加する世界林業会議は、最適の活動の場である。この世界林業会議の経過は次のようである。

当初の国際林業会議の目的は、ローマでの最初の会議以来の声明からみると、世界の林業経済を発展推進することと、人類に森林の未来を信頼させるための国際協力への希望が基本となっている。この目的を果すために、適切な指針を提示することにその後の会議の努力が払われてきた。

1954年にFAOが初めて組織したデラダンの世界林業会議のテーマが「一國の全土地経営と経済発展における林地の役割」と選ばれたように、その後のすべての会議は、「林業の将来、または林産物利用の共通的な利害があり、しかも特に重要な議題」を討議すべきであると決

議されている。

その後の世界林業会議のテーマは次のようである。

シートル会議(1961年); 林地の多目的利用。

マドリド会議(1966年); 変動する世界経済での林業の役割。

ブエノスアイレス会議(1972年); 社会経済の発展における森林。

ジャカルタ会議(1978年); 人々のための森林。

以上のテーマからみても、世界林業会議の討議は、明らかに林業とそれへの強く、かつ変転する要求をもつ近代社会との間の密接な関係についてのテーマを論議する傾向が強まっている。

討議結果は、FAO協議会の第64回会議で決められた「世界林業会議運営原則」に述べられているように、普通「地域または世界的基準で適応できる幅広い勧告の明確な表現」でまとめられてきた。これらの勧告は、最も重要なのは政策的な意味があるが、送られた機関のすなわち政府、国際機関、科学団体、森林所有者の責任において実行される。

以上の簡単な比較から、両大会はそれぞれ独立して発展したようにみえるが、実際は大会前後に両者間で常に勧告の連絡と交換がなされたので決して別個のものではなかった。世界林業会議は常に研究に関する討議時間を設け、IUFROに対して研究課題の選択について多くの要請や勧告を行っている。一方IUFRO大会は林業経済や政策問題にたえず注意を払い、FAOと政府機関に提案や勧告を行ってきた。その結果、両会議の目的に類似性が増し、短間隔での議題の重複や討論の繰返しがかなり生じた。実際にIUFRO大会と世界林業会議の間隔が1年しかなかった場合がかなりある。また会議が頻発した結果、科学者、専門家、政策責任者からなる代表団の参加が非常に困難となってきており、特に若い層と発展途上国の代表には不利となった。

#### 両大会の調整問題

もし、林業活動の全分野で感じられている科学者と経営者間の密接な交渉の必要を高たそうとするならば、両会議の組織や開催頻度について、整然とした調整を実現することが重要である。それには2つの可能な解決法がある。

第1は両会議を同一場所で同時もしくは相次いで開催することである。この解決法は、ブタベスト大会の試みから判断すると、最近のIUFRO大会が1,000人以上、また前回の世界林業会議が2,000人以上という参加者の増大や、会議組織者が会期をあまり延長せずに、全体会

議や各種分科金のすべてに時間と部屋を準備しなければならないという、途方もない困難さのために実際には実行不可能である。最近の会期はエクスカッションをいれて2~3週間である。たとえばジャカルタ世界林業会議は、討議に2週間、会議の前後のエクスカッションに2週間が計画されたが、この会期は単独の会議としてはあまりにも長すぎる。

より現実的で合理的と考えられる第2の方法は、林業会議を単純化し、正常に規則正しく繰り返すことである。

実際、IUFRO 特有の目的と世界林業会議の管理原則を同時に容認し、正常な間隔で両会議を開催するならば、両機関がそれぞれの業務に従って行動することを認め、人類の福祉のために林業の発展向上を促進するという共通目的に協力することになるだろう。この目的は、インドネシアの伝説に由来し、ジャカルタの世界林業会議の紋章に選ばれた「生命の木」によってうまく象徴されている。それは生態系概念を予想しかつ合成しており、恐らく人間を含んだ生態系の構成員の、均衡のとれた共存の自然な要求を、まったく無意識ではないが、それとなくほめかしている。

両会議の共通目的は、まさに森林資源および保全と両立しうる森林の多目的利用の知識を深めることである。この全体目的を考慮して、2型式の会議の組織を効果的に統合することを見つけ実現すべきである。この場合、IUFRO 大会は森林生態系と同時に、造林や作業技術が森林の生物的、生産的および環境的機能におよぼす影響についての、よりよい知識を求めることを目的とする本質的に科学的な性格を与えることが特に重要であろう。逆に世界林業会議は主に社会政策的で専門職的な性格をもつべきで、林学による進歩を「咀嚼」し、世界状況の変化を配慮しながら、森林政策や業務の最適路線を提案するために役にたつべきである。2系列の会議から生ずる、幾分併存かつ共存的な勧告は、もし IUFRO 大会と FAO で組織される会議との調整をより具体的かつ制度化する方法が見つかるならば、失敗の危険は少なくなるだろう。

これは会議開催ごとに次の会議の計画を行う、すなわち会議の肩書となる中心主題とともに各部門やワーキング・グループのテーマを決める特別な仕事をする、IUFRO、FAO および開催国からなる合同委員会を設置することによって達成できるだろう。

IUFRO 大会の総会中に、その前の世界林業会議の FAO の代表や他の責任者によって報告を行う特別な場を確保すべきである。これらの報告は、世界林業の傾向と要求を説明し、さらに世界林業会議の IUFRO への提

案や要請もだされるべきである。同様に、世界林業会議では IUFRO のメンバーまたは IUFRO の指名する研究者によって、林学の各分野の発展、特に最重要問題の解決のために研究によってなされた寄与を説明する会議をもつべきである。前の IUFRO 大会の結果で、林政担当の政府機関および主に FAO である国際機関の双方に關与する勧告には注意が払われるべきである。2つの型式の会議の循環が、もし相次ぐ会議の間隔が3~4年が合理的と考えられるなら、それぞれの機関の会議の間隔は6~8年となるだろう。そのような間隔は、ひとつの大会から次の大会の間に組織されねばならない IUFRO や FAO、時には共同の重要な特別会議をより定期的に実行するのを可能にする最少限必要な間隔であろう。

筆者はジャカルタの世界林業会議と IUFRO の 1981年に予定されている次の大会が、組織や開催期についての筆者の提案を始める機会となるのかもしれないと考えている。もちろん、例えば IUFRO の 1992年の百年祭のような、特別な出来事とか記念祭のために会議を延期または繰りあげることを妨げてはいけない。

(文責とほん訳 事務局・加藤, 東)

#### —日本大会へむけての本会の 募金にご協力を—

昨年の西独ミュンヘン市で行われた理事会で、日本大会の期日・会場などが決定され、IUFRO-J としても種々準備を進めています。

この日本大会運営のための経費はおおよそ2億円とみつもられていますが、その大部分は寄付金によって賄う予定です。

IUFRO-J はこのうち500万円を分担することになり、その調達には会員の方々からの寄付によることが幹事会等において合意されました。そこで昨年10月31日付け IUFRO-J 議長名で趣意書をお配りし、募金を開始いたしました。

以来、各機関のご協力により現在事務局へお寄せいただいた寄付総額は3,563千円(19機関、3月1日現在)になりましたが、未だご応募いただいていない方々もおられますので、ご出費の多い時節とは存じますが、日本大会を成功させるために絶大なご支援を賜りたく重ねてお願い申し上げます。

##### 募金方法

- (1) 募金額 1口 2,000円以上
- (2) 払込方法 〒300-12 茨城県稲敷郡茨崎村松の里1 (牛久郵便局私書箱2号)  
農林水産省林業試験場内  
IUFRO-J 事務局

## INFORMATION

## 〈日本大会の骨子決定〉

★佐藤大七郎副会長、松井オブザーバー両氏が53年10月ウィーンの IUFRO 理事会に出席することになったが、これにさきだって日本側の受入対応を協議するため林野庁組織委員会を開き、会期は56年5月24日～6月5日、会場は京都国立国際会館。シンボルテーマは“豊かな環境と資源を21世紀にのこす林業”の結論をもって、理事会にのぞむことにした。ただし理事会において討論の結果どのような結論になるかは代表者に一任することとした。

★53年10月のウィーンにおける IUFRO 理事会では、会期およびシンボルテーマについて異論が出た。シンボルテーマについては現在の世界の経済状態から研究・技術の重要性を強く打ち出すことの方がより肝要であるという意見によって“Research Today for Tomorrows forests”というテーマが採択された。

また会期については、各国とも大学の夏季休暇中の方が出席しやすいなどの意見により、盛夏を若干ずらして9月上中旬とした。

会場については、日本側の提案通り京都市（京都国立国際会館）と決定した。

★ウィーンの理事会の決定をうけて、こんごの対応協議のため各種の会議がもたれ、シンボルテーマの日本語訳、サブテーマの必要性とその選択が協議されその結果、日本語訳は“明日の森林は、今日の研究から”

サブテーマは、一豊かな資源とよりよい環境のために一として林業関係者はもとより、一般の方々にも本大会の意義を強くアピールできるようにした。

## 〈組織関係〉

★日本大会運営のための組織体制づくりについては、既に時々お知らせしている通りである。

さまざまな事情のため、未だ正式に発足していないが、協議会、組織委員会の運営規約、会計経理規約等も審議されていて、明年度早々にはすべての体制がととのう予定になっている。

## 〈予算づくり〉

日本大会運営に必要な経費は林野、林試の事務局において積算され協議が続けられているがおおよその積算は

次の通りである。

(1) 大会準備のための経費	60,000 千円
(2) 大会経費	150,000 千円
(3) 募金等の経費	10,000 千円
計	220,000 千円

すなわち2億円以上の経費が予定されている。細部については目下検討中であり、なお流動的である。

## 〈協力会の設立〉

募金活動を強力に推進するための協力組織として、その体制づくりを検討中であるが今春には設立される予定である。

林業・林産業関係団体を柱とし、それ以外の経済関係団体等も含めて広く募金をよびかける予定である。

この協力会は IUFRO-日本大会の運営組織とは別個の協力機関として運営されることになっている。

## 〈エクスカージョン関係〉

★エクスカージョンのコース案 (J-News No.5)については、各コースごとにコーディネーターを設けて、コース、ポイントの適否、重複の回避、研究専門分野からの検討、観光地の組込み旅費額、現地の受入事情、タイムスケジュール等を再検討し、旅行社と接触中であり、より具体的に編成することになっている。

## 〈主な会合〉

- ☆ 53. 9. 12 林試 IUFRO 委員会-EXC について協議。
- ☆ 53. 9. 14 林試の EXC コーディネーター打合せ会議。
- ☆ 53. 9. 29 林野、林試の担当者会議。
- ☆ 53. 9. 29 林野庁において IUFRO 理事会、日本大会の時期等について協議。
- ☆ 53. 10. 2 林野、林試、林団懇による組織体制について協議。
- ☆ 53. 10. 21 林試 IUFRO 委員会-シンボルテーマ、Div カウターパート等について協議。
- ☆ 53. 10. 25 林野、林試、学会、林業関係団体によって組織体制等について協議。
- ☆ 53. 10. 30 IUFRO-J 幹事会-募金、日本大会の運営、シンボルテーマ等について協議。
- ☆ 53. 11. 17 林野、林試の担当者会議。
- ☆ 53. 11. 28 林試 IUFRO 事務局会議。
- ☆ 53. 12. 13 林野、林試、学会、林業関係団体によって組織体制について協議。
- ☆ 53. 12. 25 林試 IUFRO 委員会-財務、業務等につ

- いて協議。  
 ☆ 54. 2. 5 林野, 林試の担当者会議。  
 ☆ 54. 2. 9                    "  
 ☆ 54. 2. 17                   "  
 ☆ 54. 2. 20                   "

- ☆ 54. 3. 3 林野, 林試の担当者会議。  
 ☆ 54. 3. 6 林試 IUFRO 委員会。  
 ☆ 54. 3. 14 林試 IUFRO 委員ならびに専門部関係者  
 により大会運営について協議。

## 第1回アナウンスメントを IUFRO News へ

昨年 11 月, IUFRO-J は IUFRO 事務局長に日本大会の  
 アナウンスメントを次のとおり連絡し, IUFRO News 等を  
 通じて公表してもらうよう要請いたしました。

### The XVIIth IUFRO World Congress in Japan

The 17th World Congress of the International Union of Forestry Research Organization (IUFRO) will be held in Kyoto Japan from Sept. 6 to Sept. 18, 1981, as Professor Walter Liese, President of the Union announced at the September Executive Board Meeting in Munich. The theme for the congress is "Research Today for Tomorrow's Forests". IUFRO is one of the oldest scientific organization in the world. Its aims are to speed up the dissemination of knowledge among forestry scientists throughout the world, according to Liese.

The 17th Congress will be held at Kyoto International Conference Hall for a week, followed by post congress tours to various parts of Japan displaying specialized and general subjects.

Kyoto, where the conference is held, is a beautiful ancient capital of Japan about five hundred kilometers from Tokyo and about three hours away by super express railway.

We believe the congress will prove successful and every participant will be contented with the result, and also through the excursion we believe all of you will gain a full understanding in the general condition of Japan as well as the Japanese forestry.

The host of the Congress is the Japanese IUFRO Congress Council. The member of the Council are the representative of all the Japanese forestry organizations, i.e., Forestry Agency, federal and local Forestry Research Institutes, Universities, academic societies and several associations.

The 17th IUFRO World Congress will be held in Asia for the first time. We do hope so many participants come from all over the world to exchange mutual information to promote forestry research for the world's future.

The address of the Secretariate of the Congress.

Mr. K. Doi

The Secretariate of the 17th IUFRO World Congress

P. O. Box 2, Ushiku, Ibaraki, 300-12, Japan

IUFRO-J NEWS No. 6

昭和 54 年 3 月

編集発行 林業試験調査部

TEL 02987-3-3211